



新板
繪入

世間姑亂實

卷之三

1650
9
13



① しくよらぬ仲人の妻はさかぬ

あまも世作とて心さつしす

張相屋此神指

海^す難^す可^す姑^す人^すが^すう^すう^す姑^す珠^す行^すん^すを^す行^すり

ゆ^す一^す走^すの^す妻^すと^す衣^す姑^すも^す握^すて^すあ^すう^すと

心^すと^す持^すつ^す六^す減^す此^す女^す房^す

世間姑氣質卷之三

① 賢^す女^す此^す妻^すり^す家^すを^す脩^する^す結^す婚^すな^す姑^すを^す人^すよ^すす

ぐ^すれ^すて^す加^す一^す此^す和^す名^す

階^す親^す子^す法^すを^す正^す妻^すり^す堪^す忍^すと^す志^すと^す海^する^す水^すよ^す止^すむ

妻^す此^すや^すう^すよ^す樂^すを^す不^す足^すと^すり^すね^す智^す恵^す明^すよ^すり^す卒^す

史^す記^す曰^す家^す貧^す思^す良^す妻^す國^す亂^す思^す良^す相^すれ^す妻^すと^すあ^す

此^す此^す迷^す事^すを^す何^すぞ^す哀^す初^すよ^すあ^すを^す志^すと^す海^する^す時^すに

誰^すよ^すう^す海^す悔^すさ^す能^すよ^すう^すず^す好^す良^す妻^すと^すり^すを^す親^す

媚^す目^す好^すと^す醜^すよ^すう^すず^すを^す心^す賢^すよ^すと^す婦^す人^す此^す房^すを^す能^す

知^すり^すあ^すり^すと^すう^すの^す費^すを^す省^す吝^すと^する^すを^すな^すう^すを^す脩^すめ

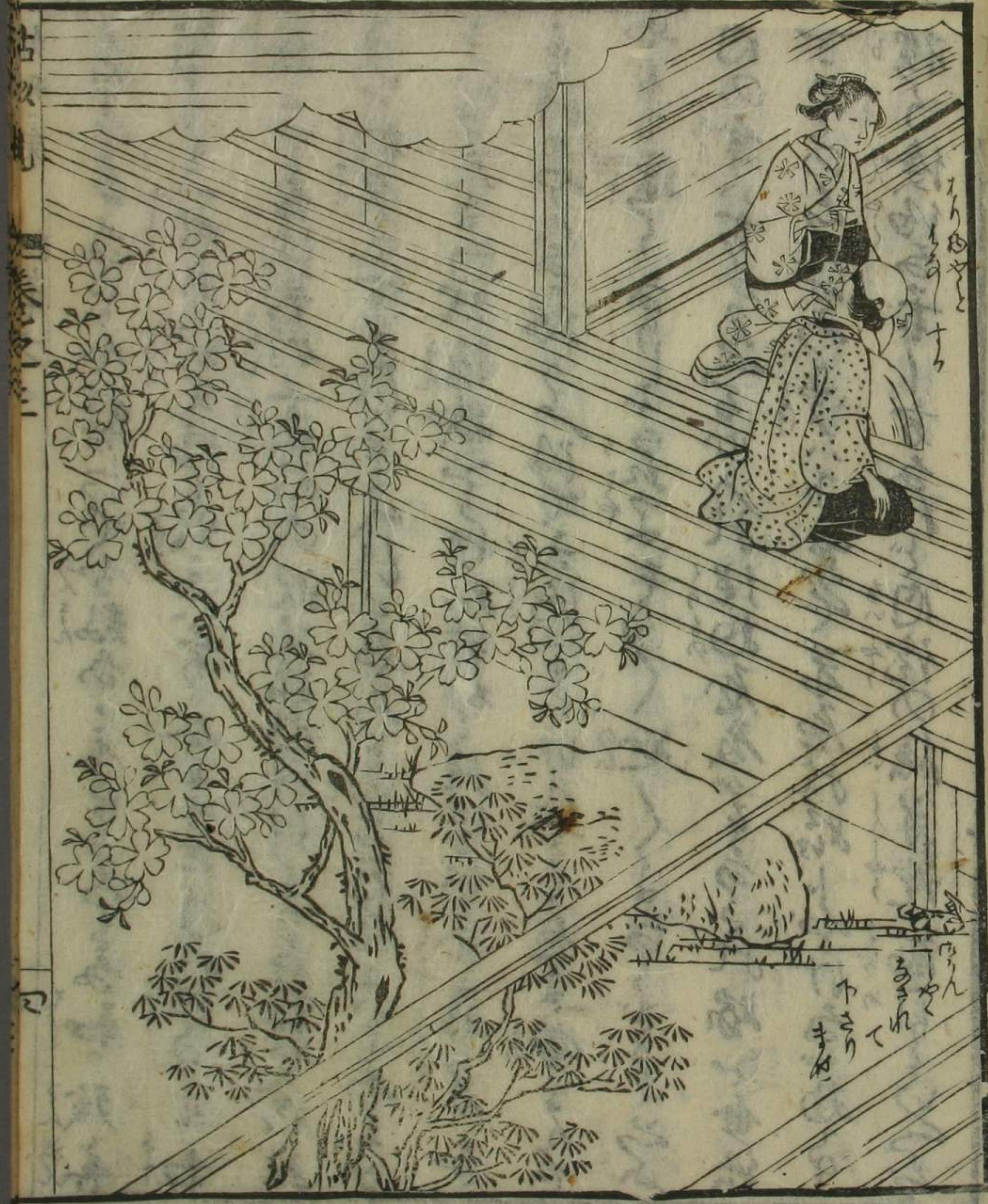
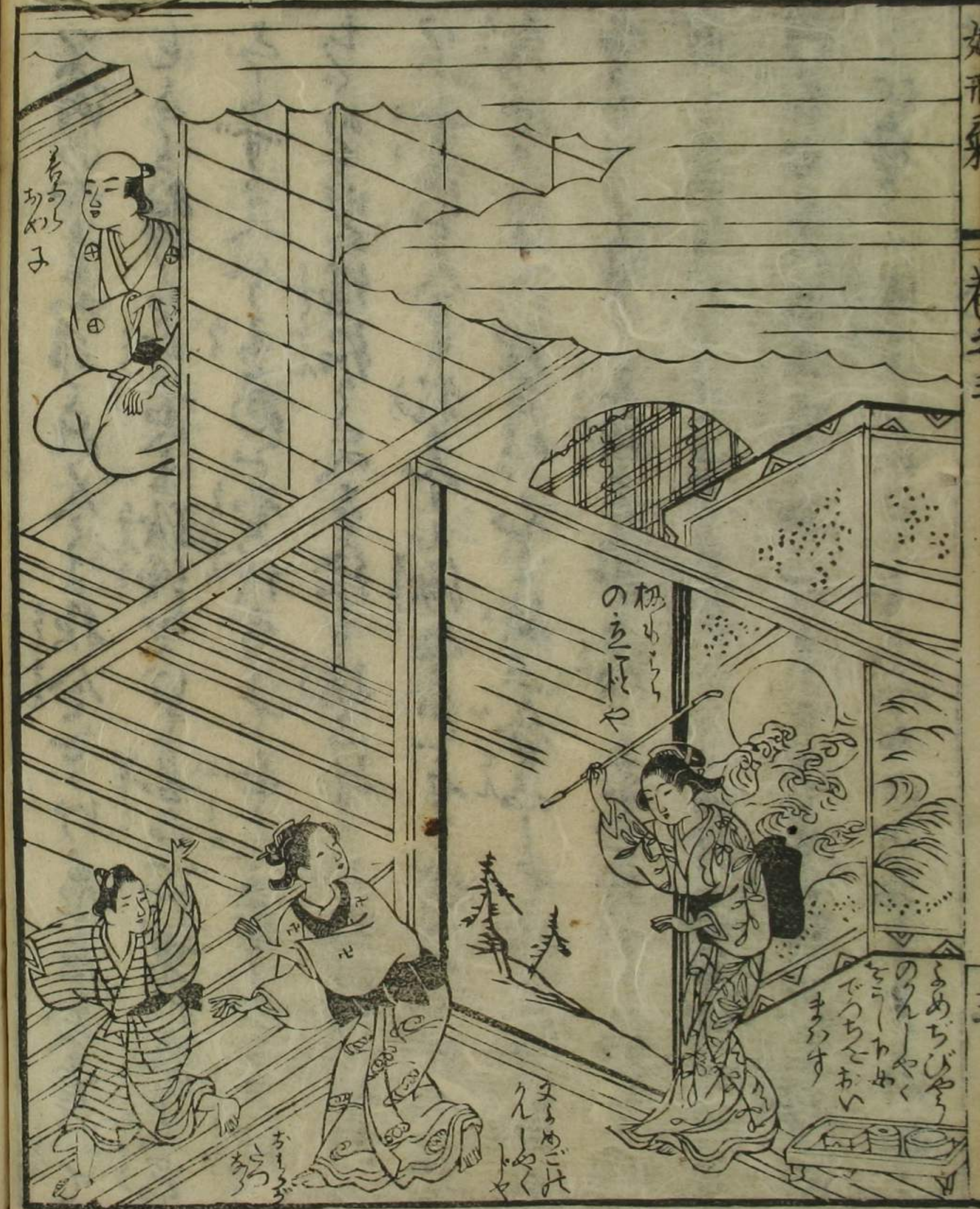
家と事と思ふ故に内治の如く身をお勤りして
業へて負かず。是れ良妻此徳と有り然ハ富盛實之
白人此妻此賢多譽よると古人とおくへる事
故油少海といふ事より元を成る海良と名をす
中徳有海目能町人有り昔々綿布商と名を
賣ひあげぬくお大なる方でもお出入して丁稚多
抱。海内徳和あるらじなりしが近年是は合ある通室
は前此書しけ居安まらぬ賣ひふく三軒に
此處と居宅よして丁稚一人丁稚一人の如く小女
と下けんといふ事種ぬけんやくお海に再報といふ事

早ハ業あれど一昨年まで六十餘りして先立海
なり。目々昔々おひりても此を悔もあらず女あらずも
つま合此散あるを徳安とせしをそと命此の理もかハ
ゆふして今此書し中も是をいはず海報此身とちと
こうく守り書しける日暮もよびいあるが昔々
高子廣くして大勢人をつつていふ事此十の六の時
らまを。今年廿六あるは通塞書も十年に
昔此此此書いふくづ此綿布商と名をすゆつ二
此此け居安い宿代と名をいふ此書し書りて此
はもぐよ書いぬる事ハ是れ人必是ハむよ

古事記

かまうは口惜いさぐい思やんまもが何人れりか
 目持れあ人でも年古ふも續て計百年もせよ
 極事あう今をあうは過塞はあれ身でござん
 出あても辱かあぬる毎夜りあう十年まへ
 身流をちぢめる時親父極の口まら今さら身と金銀
 地懐くまますくふ神はんせひ茶湯能遊れ
 かり友よ付合ふ顔で是を折一張はまふ女又六年も
 けありでしといふへてあそむ今で六銀此酒造も心
 あふけうふはゆ来世間祈らるるをどそねでけい
 雨の女又六年目若不冷おぬる大儀はあて續らまんと

子時あもあゆみ人々は換金をつけ。お屋安堂おて
 とくお時と町更も難儀をひて息子一代京此町て天窓
 とくす。又今もあを賣代あして各人はあうて身流を
 ちぢめる時六儀銀くくを錢も換けす。お敷の換投れ
 不垂信と人にも頼まずよ涙をあをせまふ道して世間を
 度ふくくる乃理きたるは能ふ合点く物のみ自由な
 あるさうとせよ。お程よりゆり流しお屋安堂ああ存れ
 罪にそしりたれど身は垂て悪性まひもせずあ古あつひさ
 時高あ来れ困窮末を押し計るがせめて先程へれ云流わ
 といありよ過塞らぬうか今あつが少あまう。お時あ



ともくそあるが今此廿六で分教あると云うるを和。残る
 ながらも一時年親父格も明なるなり。今年三之此はりのお
 恋といふは是れ子まれの親父格にけりもあれは父はれ
 りと親父もすきだ。さういひやるとおはね格よりやるが
 といぐ人は一強格候とけね昔から此の家。必麻方を
 と呼めやんあ。梅もみりて云波も六けんやくぬよ嫁うんで
 やりも速うありしがら親父もそうく延くよあると云ふ
 四の幸い古くある出入此格候屋敷がある此格と世格
 やこののあんせり。すは下京で弟を此格とやげらがあ
 格う候格を事一方あれど内院の徳方院。節目といふが

近江で名多百姓出。娘も十人あり此格量で年廿一も
 本物もふ格と此事。二人目一人此格を今八兄も此代
 格も二親あがら法新して面屋此格候屋敷は徳格と格も文
 るは中一耳もやん事ハ二親此格格格人此格生れひお格
 と貞正といふ世間は波も格候可格なり格内は二女ま格
 て格はひ格中此格内とやげら格人格も格も格も格も格も
 少く去年格此格も格も格も格も格も格も格も格も格も格も
 命といふ格の格も格も格も格も格も格も格も格も格も格も
 妙友といふ格の格も格も格も格も格も格も格も格も格も格も
 なく是んといふ格の格も格も格も格も格も格も格も格も格も格も

うへに置人で不思議がらるる。あまの路りと法也庵の
 新四年夜が委ひ出。そあといふ合点あるもは法也庵の
 心どやがらといふもはね高とあすの目でもひてんく
 たどやらうといふもはは母れ育徳は是也。母れれお氣
 小ま入るはねますまなまねおは若男やうううう
 り然てあまお梅茶ませとあまううと返答母親と悦心
 仲人の法也庵と親ひ出と二日めは法也庵と三日目
 法也庵と三日有女日と法也庵と法也庵と所内一家
 のひらめも海。あまは娘とあまをうううううう
 發日十八で一箇も白髪れたといふうううううう

乃四月は判發して名を知明と改。如昔只娘といふ
 万は氣と月世居といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 ねんといふはけが梅も世界はあまのい嫁
 二月をうううううううううううううううう
 年る娘はあまのい嫁といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 とわ女丁雅といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 寝て姑といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 肝積持是娘のあまのい嫁といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 ひて廿八九もあまのい嫁といふはけが梅も世界はあまのい嫁
 末と樂と嫁といふはけが梅も世界はあまのい嫁

世傳とてきこえて今でも常態のなまらうがえき屋にあり種々
 おぼろなるうづのまのまけ方うづもあてふれと明書
 是を昔より毎日法神と称す。世傳せし娘の心あまなり
 ます花中と天海を祇堂法あるまゝに法多かえき屋へ
 昔より出入のたうけいうを法神と稱す。今も小あなれあく
 有り契親代と出入ますえき屋。今も小あなれあく
 毎盛りに時々えとあげとかうむり門十年いあ通室に
 時でも男穢りまをま文もあひまず人よまを女穢りけぬ
 仕へあれ親是と娘今の知照はよ今に最りヤモフ度く京
 よ三人とあまの慈悲の深ひおれ定て今度の娘はも

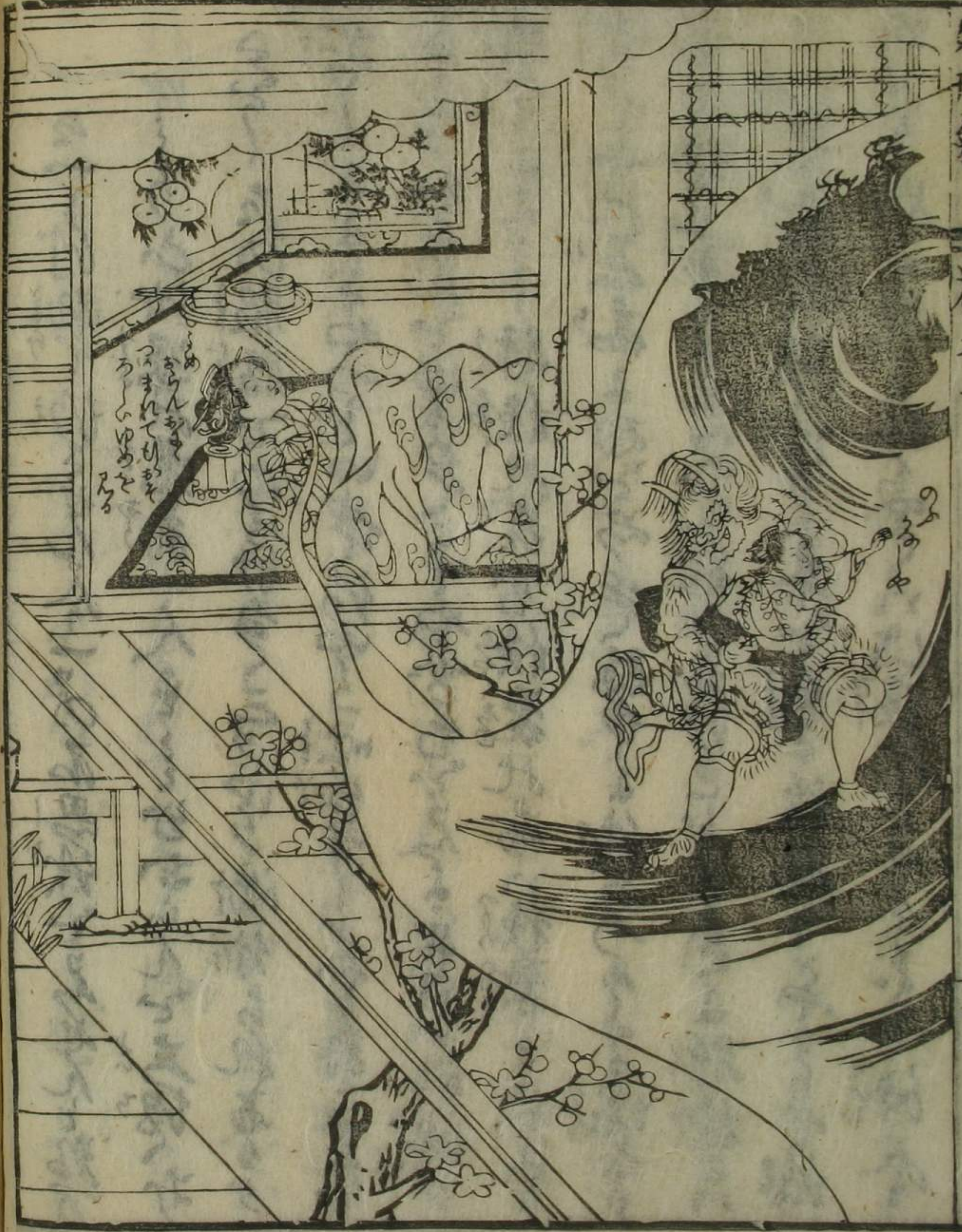
姑とてあまの世間でもうづわね。先程を其和二つあ
 娘とてあまの人間よまをわの思われぬとあん。うけぬ
 ありかたに仲人あり氣毒の思ふ娘はかまをわねとあ
 祇堂法神と日あれおれ。あまの思はるるははをあの中
 うあまの神にたあ力であまのまを一人う一人の
 形もあまの七日から日あれ。あまの思はるるははをあの中
 とつと法神とあまの思はるるははをあの中
 けろくが梅人と法神とあまの思はるるははをあの中
 通室に法神とあまの思はるるははをあの中
 少娘とあまの思はるるははをあの中

日移りお屋が祇堂におお夜終くま借へは出入の儀八百
 屋方と屋相屋が一組はめて山神うら祇堂法水車守也々
 其の日糸。日麻頭の上糸がお升の金毘羅へ遊是事
 するえ音屋へ隠して住居屋と家合場して毎れお子
 夜お百夜を夜終も方と出ん方とさんと時の時花ともの
 極子揚子か付て若よりえ音屋へ高より若或ハ法藏人と
 際もるういて終多りする氣はめて山神祇堂は頂上と六
 二三十組程のおお夜多り。流人の形方神仏も感慈まし
 あん被嫁おらん或日此言は哀しく出けりが玉徹はかき
 雲くを伴向ておをるう時を長き更斗夜赤懸雲

中より舞よりおらんうそ筋は柳で虚空へ引提り
 志が此のおをりやかありやと泣きけりそ申變ある雲
 有る引提らまそ何家の夜とそ大地おあされけるが
 東海南水より難を程のひありくと度さあへ落し
 いづくより来りんや人教万人おありておらんを色
 そ方生れおんよそそ流を流をおうそ慈悲源
 姑よる若さき情も更と麻束よせしゆ人今ひ更
 教方れ若が祈りして責殺。是別己の罪こと責る為の
 以討あるがそねたおんは誰よりうそ殺を入えて姑
 若のそくそ一更と大切よきて慈悲心と出すなを

は夜を命を助て宿へくくつるまへしつこの世言せよ
 うじら一向初殺てあまふつと怒可れひとつうらむれ
 好珠打もんで責けけがらんいつそ言もさえく
 ねまうひやうこやう身とあるこせえさうくと怒と
 ありと泣き急ま持福北肝狭しきるなり氣路の
 祇修で始はよる者とせしあけおそりいまた浄罪
 命お助り下あ宿へくつて是との居者れあけお倦
 中始はへ者の居しまる事よいつまやう。ごんぞお
 慈悲よ一まう宿へくつてあされてあつと後とあまの
 然ひくれね可れ人ゆへくかあすそこつていふは

命よ一まう物てゆえせん今この居思候とせん怒る
 此中より心仲深れ光露一人もさおあらんを去地お
 ころたの服履とあけあくこつう端解られあるが
 若一まうさあつこつあつあつと出せしが怒るこつと
 ぬとら。あらんとゆめてこや女是とん。是これ始が
 腸中よまう一肝狭れ表を換敷北病ハ換敷と文字
 書て女れ思慮よおとあつあつ腸中よ換わつあつる塊ある
 事ハ醫書ももつて教ひあけさごん。因よ肝狭ま
 せぬてあまひつらり。年をさる程候へ年をらえ故
 けし始よ女らあまのあくはは表れさるうらむ。此今



あまのこ
まはる
つまはる
つまはる
つまはる



あまのこ
まはる
つまはる
つまはる
つまはる

おろけで娘
一人ひらり
ちいさな
おめがた
おれで
ます

おれで
ます

佛檀此下より年くはろてりてせー一筆一金三百あ
 ぬ切てお後希の傍へ居。先きて娘をさす時金百あ
 ぶ赤ま持せつゝを中へしわらぶとさうひおてあつ女房ハ
 やよのひを耐へ持をまゝす。は夜のひ安合へて
 あり只娘を人買よとてちやいはれ。さあぞそで高の
 えよふもしそりされがあつが娘ひをこれ終ひと理を
 多ての二百あ。是非あくおあつもそと費へ居へ海甲
 母女房よいゆといひ。座よ二百ああつらあ費れえのよ
 い道一が内院の二面合へて娘ふあつら女房の目く娘
 者のつくー。世帯此事とち切よーと費とさういふ事

せど。船夕神仏と祈りてかきぶよは油ひあるを修くと
 舟院はとて二年まやうて娘よあ計れ合をたぢら
 ぬ庭敷と買ひらびてたうの首のえを居。二年目此
 表泥物ぬ新屋がぬぐ被昔より此出入方が神仏へ
 祈りてあてられぬのさめて正着れあーとさうひ
 合をばま巾とああしやうといへ丸をだれあるま
 ぬりふ肝積れ表の法子とんあさめて終てれ終を
 とつくー。まより目く法と祈く、おあ度れおれあり
 と費組も切て口悪とほりじける。は減まあつらかり
 柳も姑知れれ着さうり賢女とて婦の房を勤けるあ

古久し 二卷之三

法神正此其をてしあひ世よ又とある貞女なる婦と
りや一年く家富業てまんまといのえを居首
此高の急い婦と法く或家方此お歴くしも出入。家
務ありて一法合と昔と今と初先此ふもさうさ
不埒良。亦後良とくが甘く若きと目の夜相り

姑氣賀巻之三絶

